

大正から昭和にかけての建築家の言説 その5

正会員 ○ 櫻木博章*1
同 近藤正一*2
同 姜 涌*3
同 若山 滋*4

『建築世界』にみる「建築」という概念をめぐる言説の変遷

1. はじめに

大正から昭和にかけての建築ジャーナリズムにおいては、「建築」という言葉の意味が大きく揺れ動き、その変遷が「建築思想」の変遷を端的に表していることがうかがわれる。「建築」という言葉は、1897年に造家学会が建築学会と改称して以来、少しずつ確立されていくのであるが、特に大正から戦争期にかけては、「建築」の概念そのものが、そこに芸術性をも含むものとして模索され揺れ動き大きく変化している。そのことは建築家の言語活動にも明確に表れ、日本の社会状況と関連した建築思潮の変化を物語っている。また当時の言説における「建築」という概念の変化を探ることは当然、現在の日本における「建築」概念の履歴を把握し、その総合的な意味を理解することにもつながる。本研究では1913(大正2)年から1944(昭和19)年を対象として、その時期を代表する建築雑誌の一つである『建築世界』の中に表現された言説を分析することで、「建築」という概念の変遷を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

- 『建築世界』に寄稿された評論の中から筆者の「建築」に対する概念が明確にあらわれている言説を抽出する。
 - 「建築」の概念の振幅を捉えるため、精神性から現実性という軸を設定し、抽出した言説を軸の階調により思想・理論、文化・風土・社会・習慣、意匠・表現・様式、計画・要素、環境・衛生、経済・産業、構造・材料の7要素に分類する(表-1)。
 - 分類された言説の関係性について考察し、1913年から1944年における「建築」という概念をめぐる言説の変遷をみる。
3. 「建築」という概念をめぐる言説の変遷

1913年から1922年の期間は、「建築」という概念を揺り動かすような社会的要因がほとんどなく、「建築」とは何かを純粋な立場から明確にしようとしていた。この時、「建築」は美術、実用、科学が同居する三元論から、「建築」を芸術とみる立場と実用的なものとする立場に別れ、対立が生じている。また、様式は西洋様式から和洋折衷様式へと変化し、さらに西洋様式の模倣に対する疑問から否定へと意識の変化がみられる。これは、西洋からの自立をめざす意識の芽生えであるといえる。また、この期間において問題視されていた木造都市脱却に向けて、耐火構造の必要性が盛んに論じられていたこともわかる。1923年関東大震災の発生により、前述の期間において求められた耐火性に加え耐震性を求めた結果、「地震国である日本において最も有効な構造、

表-1 抽出した言説と軸の要素との対応例

抽出した言説	軸の要素
建築には其時代の気分が表はれる	思想/理論
建築は時代の思想を代表	
建築は思想の具象化	
建築は自己の結晶物	
建築は渾然たる一個の有機体	
建築は今や構築	
建築は時代のシムボル	
建築は吾人の国民性を充分に表現せるもの	
建築は善し悪し共に人生の鏡	
建築は都市を構成する物的要素	
建築とは人間生活の容器	
人間性の満足が重要なもの	
時代の要求に迎合したる意趣あり生命ある建築	
戦争と建築は深い縁	
建築なるものは其土地の生産物である	文化/風土/社会/習慣
建築なるものは其国の習慣と終始関連して居るもの	
建築は文化の華であり実	
建築は芸術である	
わが国の風土に適すべく考察	
建築は社会の重要な要素	
芸術たるの要素を失いつつある	
建築は造兵技術と共に進歩	
建築は民族に属する	
大東亜建築は日本に誕生して大東亜全土を被う	
西洋の建築様式を日本も採用して差支へない	意匠/表現/様式
建築は外国の模倣である	
日本趣味を西洋建築に應用して建築美を發揮する	
建築の形を支配するものはプロポーションである	
都市の建築は美観である	
世界的建築とは泰西式である	
様式は無理に捏造さるべきものでない	
現代建築の害毒となる処の混雑なる折衷主義	
建築様式は国の氣候風土、産出する材料に依って決定	
建築にはそれ自身に固有の美しさが存在	
現代日本の建築は『國際式』であり、『新日本式』	
外觀は其内容に適切なる表現	
建築は様式により創作されぬ	
コルビュジェの影響が大きい	
建築は國際化しつつある	
裝飾の復活を思わせる	
形態美が一つの重大な要素	
建物の色は其の周囲の色	
美術的要素と実用的要素と科学的要素の有機的結合	計画/要素
内部の充実ということをも必要とする	
建築物は機能的でなければならない	
建築は目的と要求の充足	
良き建築は堅牢であり実用的	
住居面を「最小限住宅」にまで縮小する	
建築設計の優劣は外觀のエレベーションでなくプラン	
規整と統一性と合目的造型の方が技術よりも重大	
建築の目的は便利、堅牢、快適	
防空的要素を遊離させられない	
建物は人間の生活、健康と常に密接なる關係を保つ	環境/衛生
市街の建築は各個の建物が衛生的たる事を要する	
住宅の衛生的条件の、完備は文化的要素	
居住の最小限は空氣と光線と空間との基本的最小限	
建築と雖も經濟を離れて成り立つものではない	経済/生産
最小限度の經濟を以て、最大限度の効果を生むこと	
不燃建築が最も經濟的	
鉄筋コンクリート造より木造が經濟的に安固	
建物は其の存続上多少の修繕を要しないものはない	
建築自体が規格統一される	
日本の建物は殆ど可燃物性の建築である	構造/材料
耐火的建築の急かつ必須	
我國の建築は構造偏重	
此後の建物は耐震的であると同時に耐火的	
耐震構造は地震国にあるからには必要である	
『建築材料』の存在せぬ時、建築は世に存在せぬ	
規格統一と材料供給の自覚	
近代の建築が鉄筋コンクリートの如きを主体とする	
住宅の全部を耐震耐火構造に改むるは國情の許さざる所	
乾式が耐震耐火にして完全な壁体を作るよい構造法	
都市建築物の総てを耐火、耐弾、耐ガスのならしむる	
建築は各種物質の綜合体	

Discourse of Architects from the period of Taisho to Showa part 5

Changes of discours concerning conception of "architecture"on 'Kenchikusekai' from 1913 to 1944

SAKURAGI Hiroyuki, KONDO Shoichi, JIANG Yong, WAKAYAMA Shigeru

材料は鉄筋コンクリートである」と認識され、その普及は勢いを増した。しかし、それと同時に木造の利点を唱っていることから、木の国である日本に普及する事は困難であったといえる。震災の物理的要求による構造、材料面での大きな変化は、材料の経済性を考慮する必要性にも迫られる結果となった。さらに、構造、材料、経済の要求が満たされ始める頃、次のステップとして衛生、環境の整備に論点は広がる。この一連の実用への偏向により、「建築」を芸術とみる動きはバラック装飾という特殊な場合もみられるが、ほぼ、一旦幕を閉じることとなる。1927年以降、理論のない構造、材料のみの近代化に疑問をもった一部の建築家たちは「建築」の理論化を推進する。建築理論により「建築」の機能を追求し、文化的な意義を削ぎ落としていくことで、多義的であった「建築」は一義的な「構築」へと変化した。建築家たちは、「建築」をコルビュジェ、グロピウスらの「建築」よりもさらに純粋な「機械」へと還元することで、世界の建築界の先頭に立ち、今まで背中を見続けた西洋に対するコンプレックスを払拭しようとしたのである。その後「構築」の理論は、喪失した人間性の回復を求められる一方で、戦時下の要求と相俟って、その理論に従い現実世界に具現していく。1936年以降、「建築」はファシズムの影響を受け、社会或いは国家の一部として何等かの政治的影響を受ける存在となる。これと同時に震災後一時姿を消していた美が再認識される。戦争という緊迫した時代に現れた美のかたちは大正初期の西洋様式の「建築」に見られる様式の美ではなく、合理主義、機能主義の「建築」が潜在的に有する形態の美であった。この時期の「建築」が「時代の文化のモニュメント」と考えられていたことから、「建築」にある種のシンボリックな意味を持たせようとする現れであったといえる。防空意識の高まり

は、「建築」に様々な規制を与え、形態だけでなく色彩などにもその影響は及んだ。また、1923年以降論じられ続けた日本独自のスタイルを求める動きは、西洋建築との差異を追求した結果、その答えを日本伝統建築に見出す。民族意識の高まりと共に、ナショナリズムの影響を受けた建築家たちは、日本伝統建築と融合しシンボリックな意味をもった日本独自の新建築によって、「ルネサンス文化を凌ぐ大東亜文化圏」の創造を始める(図-1)。
4. 結論

「建築」という概念は時代ごとに様々な要求に応じて変化を見せる。それは「建築」の存在の意義がとても不安定で、「建築」という言葉自体が社会に定着していなかったことの現れである。明治以来、西洋文明の後を追おうとする日本人にとって、「建築」という概念においても、西洋の様式建築は憧憬と模倣の対象であったが、日本の経済力が向上するにつれて、単なる模倣から、日本独自のスタイルと概念が求められるようになる。その一方、関東大震災後、再び西洋から出発した近代建築の鮮やかな登場に刮目させられることになる。歴史的文化的意味を削ぎ落とした「建築」の先にあったものは、日本と西洋という対立関係を離れたインターナショナル・スタイルという概念であった。戦争が近づき、ナショナリズムが影響を及ぼし始めると、日本の「建築」は他国との差異を求められ、再び伝統的民族的スタイルを追求する動きが強まる。常に能動的に近代化していく西洋に対し、その影響を受けることでしか近代化を為し得なかった日本は、そこに生じるある種のコンプレックスを払拭しようと、「建築」の概念を度々転換させたのである。それは近代化過程において、「建築」自身が、精神性と現実性の狭間で、その居場所を探し求める旅であったといえるのではないか。

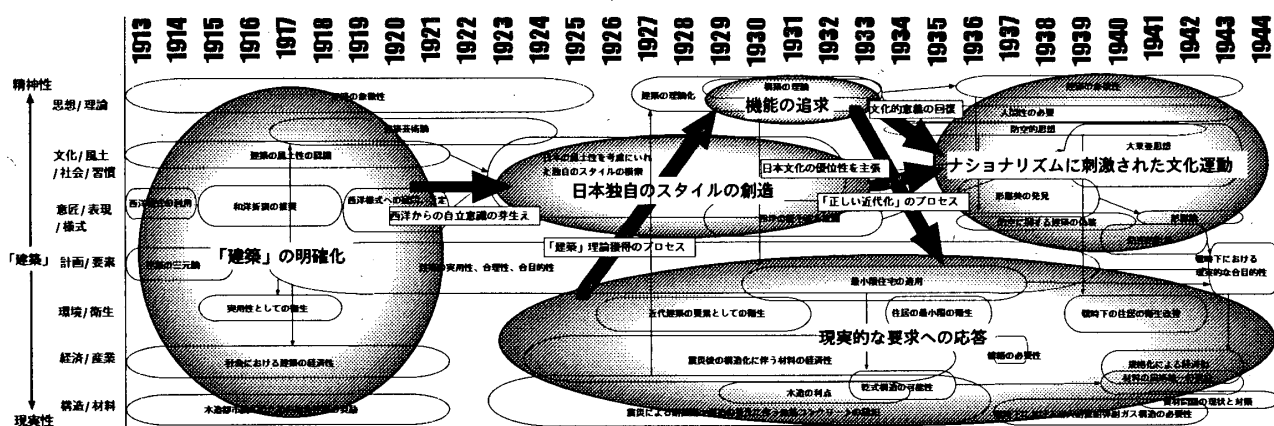


図-1 「建築」という概念をめぐる言説の変遷

*1 名古屋工業大学大学院博士前期課程
*2 名古屋工業大学助手・修士(工学)
*3 久米設計・博士(工学)
*4 名古屋工業大学教授・工学博士

Master's course, Nagoya Institute of Technology
Research Assoc., Nagoya Institute of Technology, Master Eng.
Kume Sekkei, Dr. Eng.
Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.